

日本におけるプロト産業化期の地域活性化(4)

——長野県における公立小学校立地集落の活性化——

田 村 正 夫

I. はじめに

II. 活性化集落の比較

- (1) 活性化集落の分布
- (2) 維新前の所領
- (3) 雑税額の分布
- (4) 人口移動
- (5) 馬・牛の保有
- (6) 荷車・人力車の保有

III. 活性化と地域区分

- (1) 最高活性化地域——東・北信——
- (2) 高活性化地域——中信を中心に——
- (3) 最低活性化地域——南信を中心に——

IV. 活性化と集落特性

V. むすび

I. はじめに

文化科学において社会集団を研究しようとするれば、それぞれの社会集団の特質が、それらのおかれた環境といかなる関係をもって形成されてきたのかという問題を、検討せざるを得ない。巨視的にいえば、日本における産業化の進展は著しかったのであるが、それをもたらしした要因を追究するためには、産業化の直前の時期、すなわちプロト産業化期¹⁾における日本国内の地域差を、活性化の視角によってとらえ直し、その後の産業化の地域的基盤としての意義を解明する必要がある。

筆者は、先に、プロト産業化期としての明治初期における活性化の全国的趨勢を、公立小学校の授業料及び教員数を指標として検討すると

ともに、群馬・埼玉両県の地域的特質についても論述した²⁾。さらに、両県における公立小学校立地集落の最高活性化について論述した³⁾。また、それと対比するために、公立小学校立地集落の最低活性化について論述した⁴⁾。

本稿では、両県よりも低次の活性化を遂げたとみられる長野県⁵⁾を対象として、公立小学校立地集落における活性化地域の特質を、比較して検討する。つまり、長野県において、高い活性化を示していた公立小学校がいかなる特質をもつ集落に立地していたのか、また、これとは反対に低い活性化しか示さなかった公立小学校が、いかなる特質をもつ集落に立地していたのかを明らかにすることによって、活性化の地域差を生じた要因を解明するものである。

一般的には、生徒1人あたりの授業料(月謝)が高額であればあるほど、また教員1人あたりの生徒数(以下、生徒数と略称)が少なければ少ないほど、活性化が高かったと解される。そこで『文部省第2年報』(明治7<1874>年)によって、長野県における学校ごとのこれらの数値を検討しよう。旧長野県⁶⁾における各学校の授業料欄には、「適宜」と「ナシ」の2種の記載がみられる。また、筑摩県における各学校の授業料は、記載されていない。つまり「学費ハ素民力ヲ以テ成ル所ノモノナレハ授業料ノ多少或ハ無之校モ有之其他人民情実ノ適宜ニ任ス⁷⁾」という状況であった。

本稿においては、生徒数が15人未満の学校のうち、授業料が上述のように「適宜」とされる場合、最高活性化、無授業料の場合、高活性化

を示すものとした。一方、生徒数が185～350人に達し、しかも無授業料である場合、最低活性化を表すものと考えて抽出した⁹⁾。そして、これらの学校が立地する集落の特質を、『皇国地誌』⁹⁾を使用して考察する。

II. 活性化集落の比較

(1) 活性化集落の分布

最高活性化集落と、これに次ぐ高活性化集落、さらに最低活性化集落の各分布をみよう(図1)。最高活性化集落は、北国街道沿いを中心とし、南は中山道の一部、北は飯山・谷・野沢3街道に連なる千曲川流域に分布していた。これに対して、高活性化集落は、糸魚川街道沿いの姫川・高瀬川両流域から長野盆地を主体とする地域、最低活性化集落は、伊那・遠州両街道沿いの天竜川流域、中山道沿いの木曽川流域のほか、諏訪に点在していた。

このような東・北信にみられる最高活性化集落の卓越は、群馬県の最高活性化地域¹⁰⁾からの連続をなすものとみられる。つまり、ここが、険阻な三国峠越えを除けば、群馬県側と北陸を結ぶ実質的な最短ルートにあたっていたことが、最高活性化集落卓越の一要因であったと解される。これに対して、中信からさらに南信にいたるに及んで、群馬県の最高活性化地域からの実質的な距離が増大し、また北陸～関東の連繫ルート¹¹⁾から遠ざかっていたことが、活性化低下の一要因であったとみられよう¹²⁾。活性化の地域差は、1874年における公立小学校の授業料・教員数(『文部省第2年報』によって作成)の分布図¹³⁾によって明らかであり、さらに1890年代以降における製糸業の地域的展開をみると、一般に、東・北信の先発的特質と中・南信の後発的特質が対比されること¹⁴⁾によってもうなづけよう。

(2) 維新前の所領

最高・高・最低の各活性化をもたらした1つの要因として、維新前における所領関係をみよう(図2)。まず注目されるのは、幕府領と松

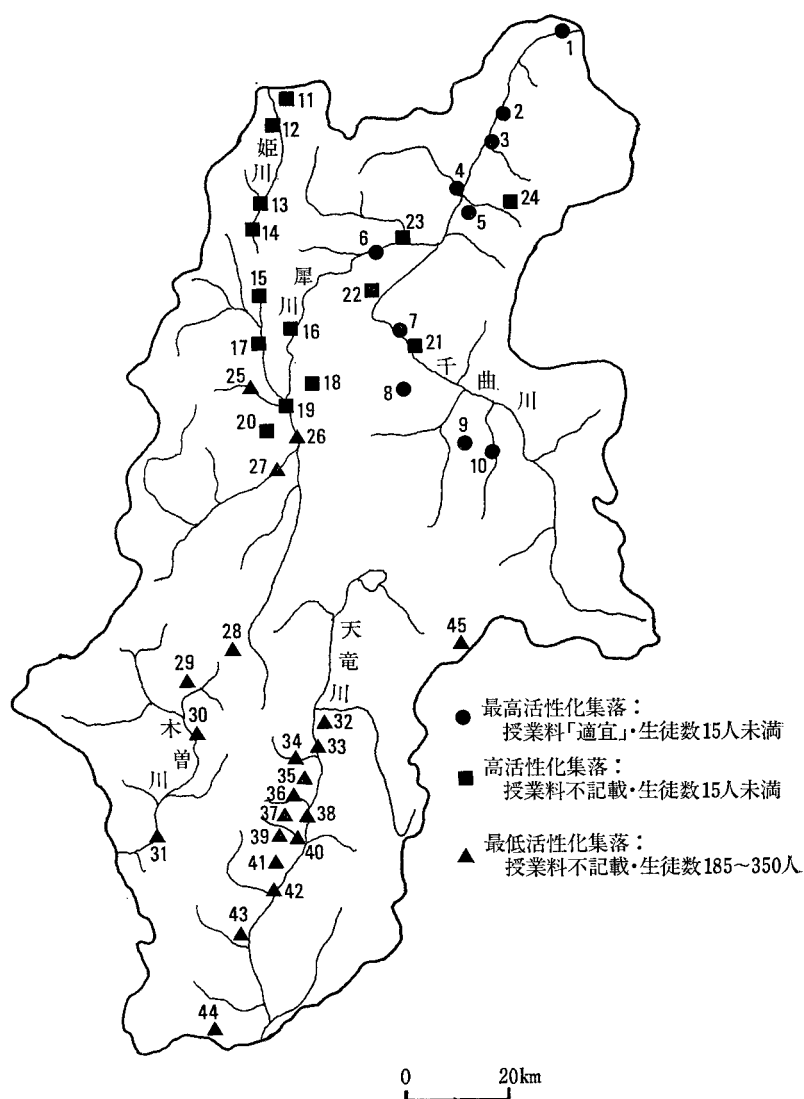
本藩領が、それぞれ対象集落数の34%、30%をしめていたことである。しかし幕府領については、その60%は最低活性化集落、27%が最高活性化集落、13%が高活性化集落に各分布していた。いいかえれば、幕府領はかなりの活性化をみたものの、その多くは最低活性化にとどまっていたのである。

一方、石高6万石の松本藩領については、高活性化集落が77%をしめ、残りが最低活性化集落であり、幕府領とは対照的であった。松本藩は、松平(戸田)光慈入封の享保16(1726)年以来、9代146年続き、幕末期には終始佐幕大名としての道を歩んだ¹⁵⁾中藩である。高活性化集落数の71%は同藩領に分布し、残りは幕府領と松代藩領にまたがっていた。

また、最低活性化集落数の43%は幕府領であり、これに次ぐのは、19%の無高の尾張藩領であった。木曽谷は、豊富な木材資源によって尾張藩61万9,000石の財政に寄与してきたが、一方では、地元における活性化の基盤を強めることは困難であったものとみられる。次いで14%が松本藩領内の南部、さらに9%が、明治2(1869)年に領内一揆を起こした譜代小藩の高遠藩(3万3,000石)領であった。

このほかの最低活性化集落数は5%ずつで、それぞれ、かつて高須・飯田・高島の諸藩に属していた。伊那の高須藩領¹⁶⁾は、豊富な木材資源によって藩財政を支えてきたものの、木曽谷同様、村落自体の活性化をもたらさなかったとみられる。また高島藩3万石は、譜代とはいえ小藩であり、飯田藩2万石は外様小藩であった。

他方、最高活性化集落数の40%は幕府領であったが、これに次ぐのは、20%の小諸藩領であった。小諸藩1万5,000石は、牧野氏入封の元禄15(1702)年以来、10代167年続いた小藩であった。このほかの最高活性化集落数は10%ずつで、それぞれ松代・上田・飯山・須坂各藩に属していた。松代藩は、元和8(1622)年の真田氏の入封以来10代200年続き、信州最大の石高10万石¹⁷⁾をもち、譜代に準ずる外様藩であって、前述の高活性化集落数の14%をもしめてい



- | | | | | | |
|-------------|------------|---------|--------|-------------|--------|
| 1. 箕作 | 2. 上木島 | 3. 柳沢 | 4. 浅野 | 5. 日滝 | 6. 山布施 |
| 7. 磯部 | 8. 越戸 | 9. 山部 | 10. 望月 | 11. 北小谷（戸土） | |
| 12. 北小谷 | 13. 北城 | 14. 神城 | 15. 平 | 16. 八坂 | 17. 社 |
| 18. 東川手（砺俣） | 19. 東川手（潮） | 20. 科布 | 21. 金井 | 22. 向八幡 | |
| 23. 丹波島 | 24. 牧 | 25. 有明 | 26. 高家 | 27. 倭 | 28. 木祖 |
| 29. 新開 | 30. 駒ヶ根 | 31. 読書 | 32. 伊那 | 33. 宮田 | 34. 上穂 |
| 35. 小町谷 | 36. 飯島 | 37. 七久保 | 38. 大草 | 39. 上片桐 | 40. 田島 |
| 41. 名子 | 42. 阿島 | 43. 三綱 | 44. 旦開 | 45. 本郷 | |

図1 長野県の公立小学校立地からみた活性化集落（1874年）

注）生徒数は教員1人あたり

資料：『文部省第2年報』より作成

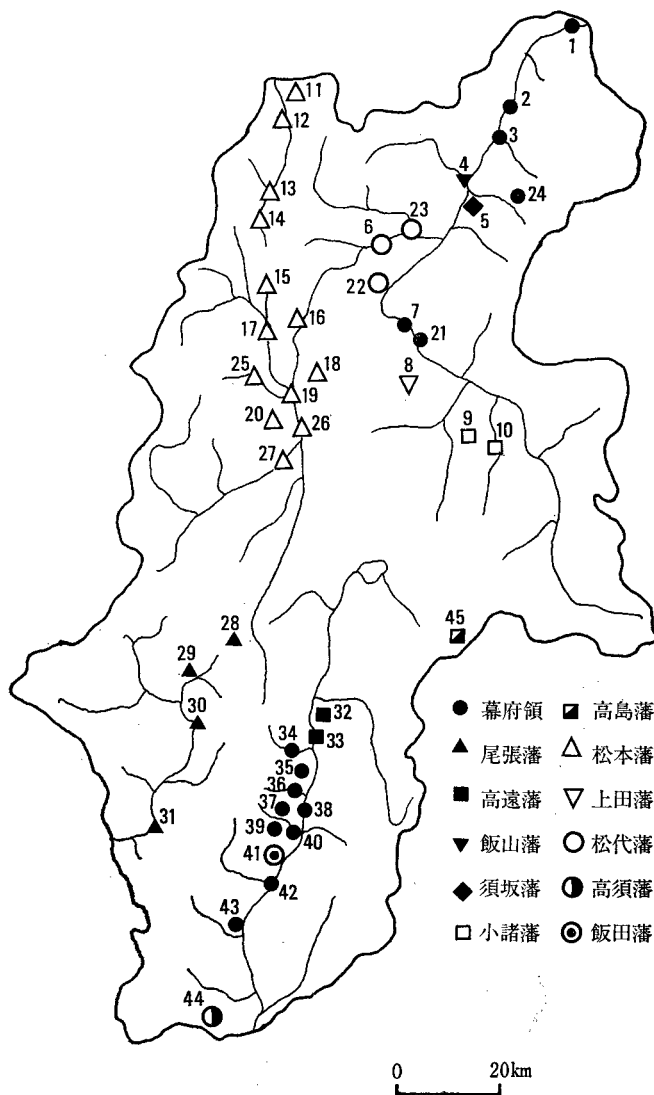


図2 各種活性化集落における幕末所領

注) 図3～8とも、集落番号は図1と対応

資料: 図3～8とも、『文部省第2年報』『皇国地誌』より作成

た。

また上田藩は、宝永3(1706)年の松平氏の入封以来7代165年続いた5万石の中藩であり、飯山藩は、享保2(1717)年の本田氏の入封以来9代152年続いた実質3万5,000石¹⁸⁾の譜代小藩であった。なお須坂藩は、元和元(1615)年の堀氏の入封以来14代262年続いた1万石の外様小藩であった。

これらを要約してみよう。最高活性化集落と高活性化集落を合わせると、旧幕府領に立地することが少なく、小所領域立地を介在させつつも、相対的な大所領域に立地するものが多かった。これに対して、最低活性化集落は、旧幕府領に立地することが多い反面、一般に小所領域をなすところに立地する傾向が強かったのである。

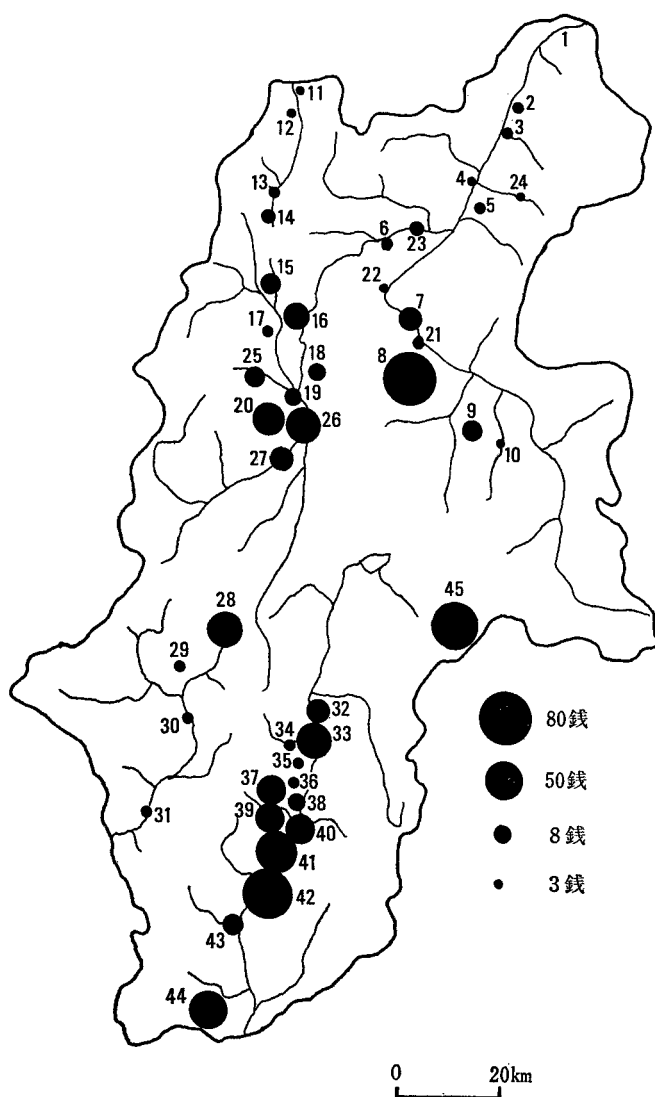


図3 各種活性化集落における1戸あたり雑税額(1874年)

注) 図4～8とも、番号のみの集落では分布しない

(3) 雑税額の分布

貢租のうち、地租及び賦金を除くいわゆる雑税は、農間に営まれる第二次～第三次産業の進展に伴って、増額されたとみられる。そこで、最高・高・最低の各種活性化集落における1戸あたりの雑税額を検討しよう(図3)。一般に、最低活性化集落においては、雑税額が、新開以南の旧尾張藩領である木曾谷や上穂・小町谷・飯島の旧幕府領を除けば、かなりの高額を示し

ていた。

これに対して、旧松本藩領を主とする高活性化集落では、雑税額が相対的に低く、さらに最高活性化集落においては、旧上田藩における卓越した高額と、その他の地域における低額との格差が著しかった。とくに、最高活性化集落、高活性化集落のいずれにおいても、北部では、きわめて低額であった。つまり、活性化が低い地域ほど、一部の地域を除けば、農間に営まれ

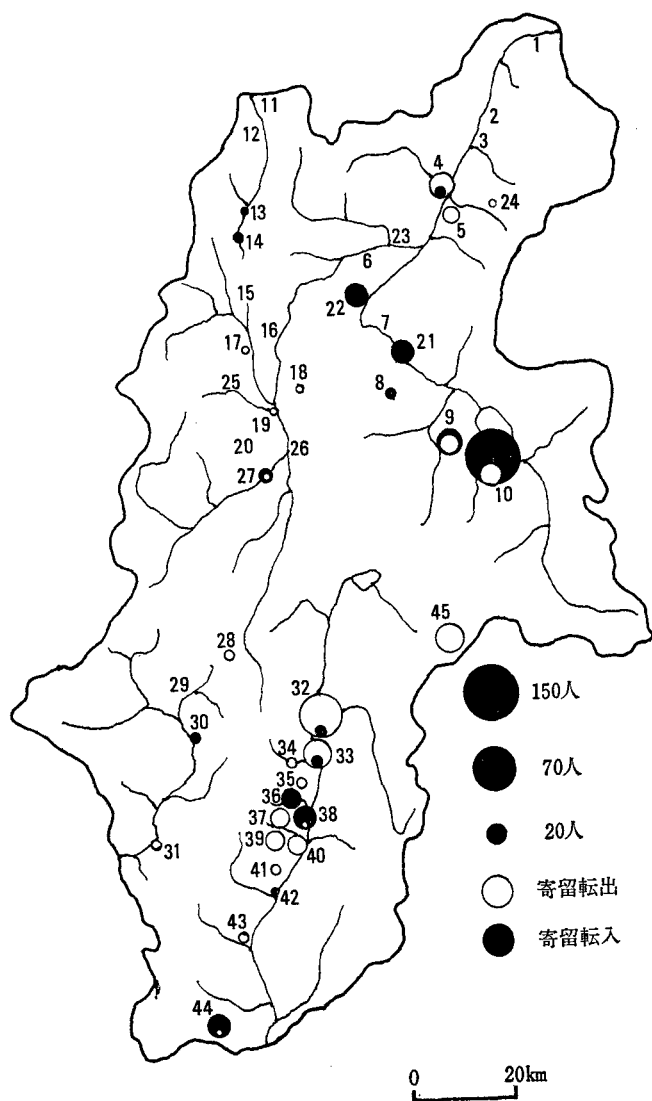


図4 各種活性化集落における人口移動（1874年）

注）14・27の転入人口は同戸数による推定

る第二次ないし第三次産業に依存する傾向が強かったという、いわば食い繋ぎ的な状況が表れていたものとみられる。これは、群馬県の場合¹⁹⁾とは逆の特徴を示していたことになる。

(4) 人口移動

各種の活性化集落における人口移動を、寄留人口によって、維新前の所領との関連のもとで検討しよう（図2，4）。旧幕府領をみると、

最高活性化集落では、人口が停滞しており、最低活性化集落9のうち、人口の社会減少がみられたのは6集落であり、逆に社会増加が認められるのは、3集落に過ぎなかった。旧松本藩領の場合、高活性化集落10のうち、5集落は社会増減がなく、3集落では社会増加がみられ、社会減少が認められたのは2集落に過ぎなかった。同藩の低活性化集落3のうち、2集落では社会増減がなく、1集落で社会増加が認められた。

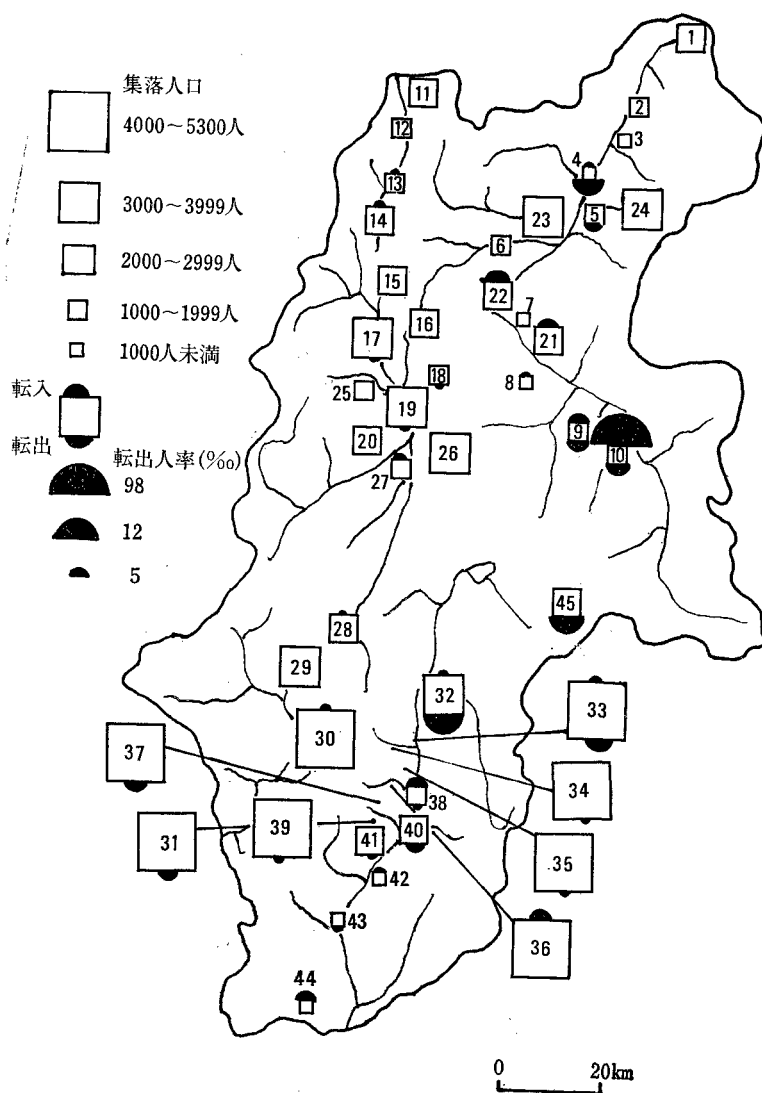


図5 各種活性化集落における人口と人口移動率(1874年)

注) 14・27の転入人口は同戸数による推定

高活性化集落の中でも、長野盆地南部における旧松代藩の向八幡、旧幕府領の金井においては、転入人口が多かった。

旧小諸藩の最高活性化集落2のうち、1つは社会増であったが、他は社会増0であった。旧飯山藩・旧須坂藩の各1集落は、最高活性化を示していたが、いずれも人口出超地域であった。一方、旧高遠藩の最低活性化集落2は、ともに人口出超であった。また最低活性化を表す旧飯

田藩・旧高島藩・旧高須藩の各1集落のうち、前2者では人口出超がみられ、旧高須藩だけが人口入超であった。

次に転出・転入各人口の対集落人口比をもって、それぞれ転出率・転入率として検討しても(図5)、図4とほぼ同様の傾向が認められる。高活性化地域において、転入率が最も高かったのは旧小諸藩の望月・山部であり、これに次いで旧飯山藩の浅野、旧上田藩の越戸であった。

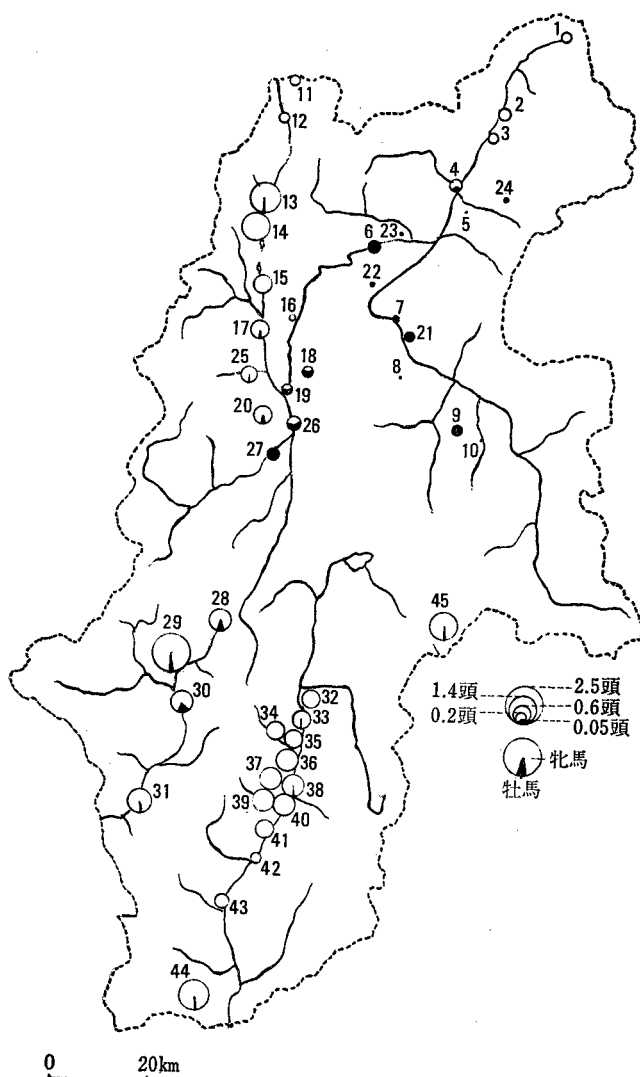


図6 各種活性化集落における1戸あたり馬保有数(1874年)

そして望月・越戸では、転入率が転出率をはるかに上回り、山部では転出・転入両率が同じであった。しかし浅野や須坂藩の日滝では、転出率が転入率を上回っていた。一方、高活性化地域では、向八幡・金井において転入率が比較的高く、これを除けば一般に転出・転入両率が低かったが、松本藩の東川手(砺俣及び潮)・社では、転出率が転入率を越え、同藩の北城・神城では、転入率が転出率を上回っていた。

これに対して、最低活性化地域においては、

旧高遠藩の宮田・伊那、旧高島藩の本郷・旧幕府領の七久保・田島・上片桐・上穂・小町谷・三綱、旧飯田藩の名子、旧尾張藩の読書が、いずれも転出超過集落であった。一方、転入超過集落は、旧高須藩の旦開、旧幕府領の飯島・大草・阿島、旧尾張藩の駒ヶ根、旧松本藩の倭の6集落であった。

そこで最高・高・最低各活性化地域において、人口移動がみられた集落の人口総数に対する移動率を性別にみよう。最高活性化地域では、転

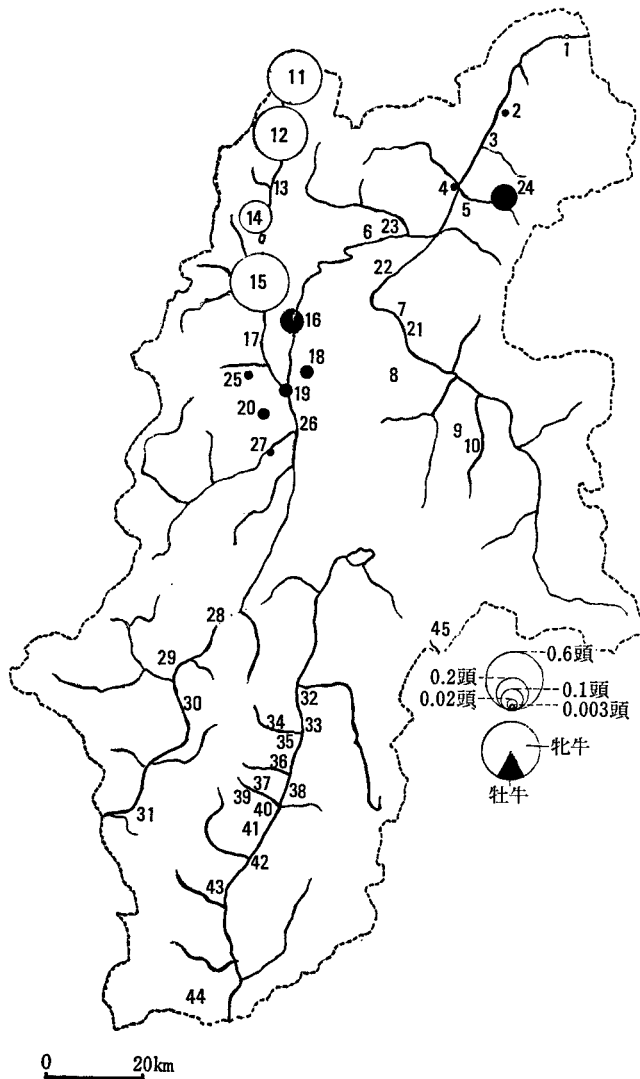


図7 各種活性化集落における1戸あたり牛保有数(1874年)

入率は男3.2%、女3.9%であるのに対して、転出率は男1.9%、女1.2%であり、女を主とする入超の傾向が強かった。これに対して高活性化地域では、転入率は男0.5%、女0.2%、転出率は男0.2%、女0.07%であり、男を主とする入超の傾向が表れていた。ところが低活性化地域では、男女とも転入率0.4%、転出率0.7%であって、出超の傾向を示していたのである。

(5) 馬・牛の保有

大量輸送手段ないし農耕用として、重要な意味をもつ馬の1戸あたり保有頭数をみよう(図6)。一般に、最低活性化地域において保有頭数が多く、高活性化地域、最高活性化地域となるにしたがって、減少していた。最低活性化地域の中では、雑税額や人口移動、とりわけ人口流出が多く、旧幕府領を主とする伊那盆地よりも、それらの少ない旧尾張藩領の木曾谷の方が、保有頭数が多く、しかも保有頭数中の牡馬率が高かった。一方、最高活性化地域及び高活性化

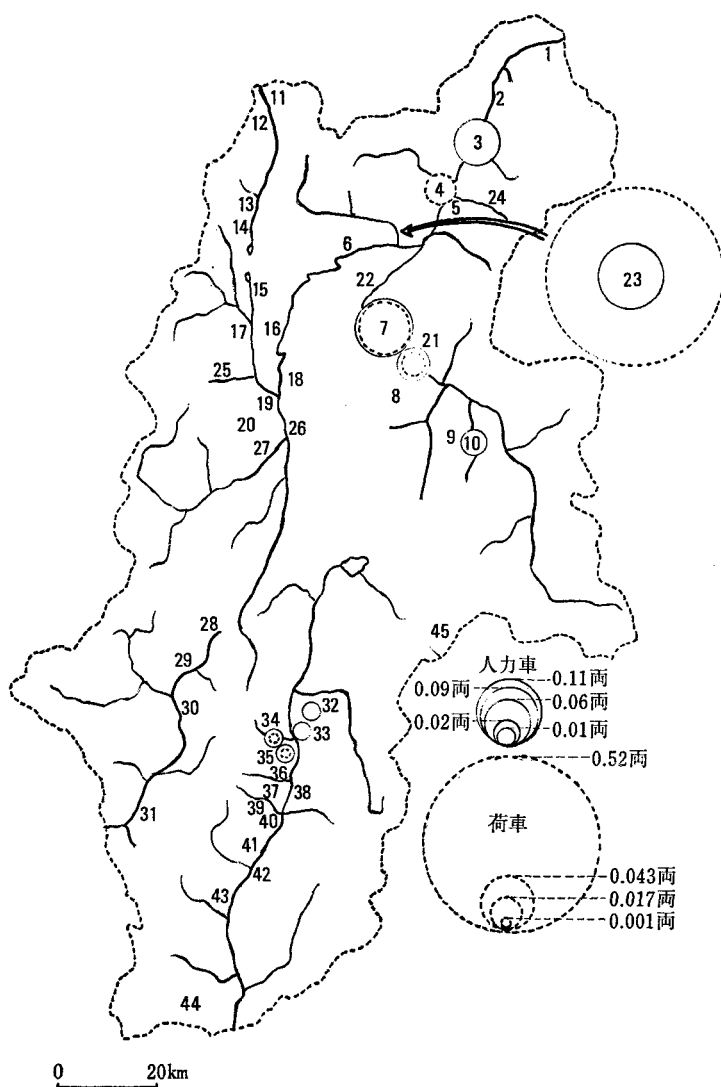


図8 各種活性化集落における1戸あたり人力車・荷車保有数(1874年)

地域において、牡馬率が高いのは、転入人口が多く、雑税額が高い南部であった。これらの牡馬率の高さは、中馬をはじめとする馬匹の利用を反映していたものとみられる。

同様に、牛の1戸あたり保有頭数を検討すると(図7)、高活性化地域に集中していた。なかでも、多くの牝馬を保有する北部において、多数の牝牛が飼われ、これとは対照的に、少数の牡馬が分布する南部では、少数の牡牛が飼われていた。いいかえれば、高活性化地域では、

雑税額や人口移動の少ない北部において、牧馬・牧牛が盛んであった。

そこで、最高・高・最低の各活性化地域において、馬・牛を保有する集落の総戸数について1戸あたりの保有頭数を算出すると、最高活性化地域では馬0.19頭、牛0.06頭、高活性化地域では馬0.65頭、牛0.21頭、最低活性化地域では馬0.81頭、牛0.008頭となる。いいかえれば、とくに低活性化地域では馬、高活性化地域では馬と牛の両者の飼育と利用によって、地域経済

の活性化を支える傾向があったものとみられる。

(6) 荷車・人力車の保有

町屋的な特質の継承ないし伸展を示唆する荷車・人力車の1戸あたり保有数をみよう(図8)。両者の分布の主体は、高活性化地域のうちの東部と、牛馬の保有数の比較的少ない最高活性化地域であったが、最低活性化地域にも、わずかに分布していた。人力車・荷車をともに多く保有していたのは、高活性化地域では、卓越する丹波島とこれに次ぐ金井であった。また最高活性化地域において多かったのは、旧幕府領の磯部であった。

人力車保有数の上でこれに次ぐのは、同じく旧幕府領の柳沢であり、次いで、旧小諸藩において転入人口の多かった望月である。また荷車数の上で、磯部に次ぐのは、旧飯山藩において転入人口の多い浅野であった。一方、最低活性化地域については、旧幕府領の上穂・小町谷では荷車と人力車、旧高遠藩の宮田・伊那では人力車の分布が、それぞれ認められた。

そこで、最高・高・最低の各活性化地域において、人力車・荷車を保有する集落の総戸数について、1戸あたりの保有両数を算出すると、最高活性化地域では人力車0.054両、荷車0.029両、高活性化地域では人力車0.05両、荷車0.14両、最低活性化地域では人力車0.012両、荷車0.001両となる。つまり、前節で述べたように、馬の飼育と利用が卓越していた最低活性化地域を除けば、人力車・荷車の利用も、活性化に対してあずかって力があったとみられる。

Ⅲ. 活性化と地域区分

(1) 最高活性化地域——東・北信——

最高活性化地域においては、1戸あたりの耕地面積は約6反であって、集落数の40%が6反台、20%が4反～5反台であり、3反台と1町2反台は各10%に過ぎず、一般に零細であった。適作物としてあげられる農作物の種類をあげると、62%が穀物・いも類であり、これに次ぐ菜種・煙草・荳・豆類が21%、桑・麻・綿・楮類

が15%であって、野菜類は2%と低い。また水田・畑の両面積を集落単位にみると、畑の方が水田よりも広い集落が50%、両者がほぼ等しい集落が30%、水田の方が畑よりも広い集落は20%であり、畑作が主体であった。

生産物を農産品・工産品・林産品・水産品に5分類し、各々について上等品・中等品・下等品の別を明らかにしたうえ、これらの生産物が出荷された範囲を、当該集落内・近傍・県内(前2者を除く)・県外局地・全国に区分して考察してみよう。なお、出荷量単位が様々であるうえ、金額の多寡を統一的に把握することが困難であるため、各集落ごとに、上記の5分類生産品中のいずれかが1品目以上掲載されていれば、1件として算出した。

上等品は全生産の17%であったが、その63%は、農産品を主とする当該集落の需要をまかなっていた。また全生産の53%を占める中等品の場合、農産品・工産品を主とし、その44%が当該集落内に供給されていた。上等品の場合、当該集落向け以外は、県外局地向け25%、全国向け12%であったのに対して、中等品では、当該集落向けのほかは、近傍向け32%、県内向け、県外局地向け、全国向けが各8%に達していた。これを全生産についてみれば、49%が当該集落、19%が近傍、11%が県内、15%が県外局地、6%が全国に、出荷されていたのである。

さらに、農間稼ぎ戸数の明らかな集落について、総戸数に対する同稼ぎ戸数の比率をみると、14%にとどまっていた。その業種としては、筆頭が農桑であり、薬細工・薪炭・諸商い・職人・養蚕がこれに次いでいた。なお、1戸あたりの家族数は4.7人であり、家産に関して「富者」と称される家の比率は26%であったが、雑税額の明らかな集落について1戸あたりのそれを算出すると、約6銭に過ぎなかった。

(2) 高活性化地域——中信を中心に——

高活性化地域においては、1戸あたりの耕地面積は約8反4畝であって、集落数の58%が7反～9反台に集中し、2反～5反台が28%、1

町～1町2反台が14%であり、最高活性化地域よりも広がった。適作物として掲載される農作物の種類をあげると、54%が穀物・いも類であり、これに次ぐ煙草・豆類が32%、桑・麻・綿・楮類が14%であって、最高活性化地域よりも、商品作物の比率が高かった。また水田・畑の両面積を集落単位にみると、畑の方が水田よりも広い集落が65%、両者がほぼ等しい集落は14%、水田の方が畑よりも広い集落は21%であって、最高活性化地域よりも、畑作主体の傾向が強かった。

先に最高活性化地域について検討したのと同様の方法によって、生産物の種類・品等・出荷先を考察しよう。上等品は全生産の21%であったが、その36%が農産品を主とする当該集落の需要をまかなう程度であり、最高活性化地域と比べると低率であった。また全生産の72%をしめる中等品の場合、農産品・工産品を主とし、その38%が当該集落内に供給されており、最高活性化地域と比べると低率であった。

上等品の場合、当該集落向け以外は、県内向け21%、県外局地向け29%、全国向け14%であり、最高活性化地域と比較すると、いずれもそれらの比率が高かった。また中等品の場合も、県内向け17%、県外局地向け27%、全国向け10%であって、最高活性化地域と比べると、これらの比率はやはり高かった。このように、全生産の45%が当該集落・近傍合計向けであって、県内向け19%、県外局地向け27%、全国向け9%のいずれも、最高活性化地域の場合よりも、比率が高かったのである。

さらに、農間稼ぎ戸数の明らかな集落について、総戸数に対する同稼ぎ戸数の比率をみると、29%であり、最高活性化地域の場合よりも高率であった。その業種が農桑である点は、最高活性化地域と同様であるが、これに次いで薪炭・諸商い・荷役・職人・養蚕のほか、狩猟があげられていた。一方、1戸あたりの家族数や、家産に関して「富者」と称される家の比率は、最高活性化地域とほぼ同率であった。しかし、雑税額の明らかな集落について1戸あたりのそれ

を算出すると、約18銭であり、最高活性化地域の約6倍に達していた。

(3) 最低活性化地域——南信を中心に——

最低活性化地域においては、1戸あたりの耕地面積は、高活性化地域とほぼ同様であったが、集落数の42%が7反～9反台、4反～6反台が34%、1町～1町2反台が24%であり、高活性化地域よりもやや広がった。適作物として掲載される農作物の種類をあげると、59%が穀物・いも類であり、これに次ぐ桑・麻・綿・楮類が20%、野菜類が13%、煙草・豆類が8%であって、高活性化地域よりも、商品作物の比率が高かった。また、水田・畑の両面積を集落単位にみると、水田の方が畑よりも広い集落が67%、両者がほぼ等しい集落が9%、畑の方が水田よりも広い集落が24%であり、高活性化地域における水田と畑の比率とは全く逆転する水田主体の傾向が認められた。

次に、生産物の種類・品等・出荷先を考察しよう。上等品は全生産の30%であったが、その16%が繭及び畜産品を主とする当該集落の需要に応じるに過ぎず、高活性化地域と比べると低率であった。また全生産の52%をしめる中等品の場合、農産品・工産品を主とし、その31%が当該集落に供給されており、高活性化地域と比べると、同じく低率であった。

上等品の場合、当該集落向け以外は、県内向け10%、県外局地向け21%であったのに対して、全国向けは53%に達し、最高活性化・高活性化両地域と異なり、著しい高率を示していた。また中等品の場合も、県内向け27%、県外局地向け15%、全国向け24%であって、これらの合計を最高活性化・高活性化の両地域の場合と比べると、やはり高率であった。このように、全生産の32%が全国向けに出荷され、最高活性化・高活性化両地域と異なる特色を示していたのである。

さらに、農間稼ぎ戸数の明らかな集落について、総戸数に対する同稼ぎ戸数の比率をみると、高活性化地域の場合とほぼ同率の30%であった。

しかしその業種については、薪炭・農桑・養蚕・荷役のほか、最高活性化地域及び高活性化地域よりも多岐にわたる諸職人・諸商いが、広範に認められた。一方、1戸あたりの家族数は5.3人であり、家産に関して「富者」と称される家の比率は12%と低かった。つまり、家産は少ないが家族数が多いという実状を反映していた。したがって、上述のように農間稼ぎが多岐にわたり、雑税額の明らかな集落について1戸あたりのそれを算出しても、高活性化地域の1.5倍にあたる27銭であり、農外収入への依存度が高かったことが注目される。

IV. 活性化と集落特性

最高活性化地域において、農間稼ぎ戸数率が38%に及ぶ浅野と、同じく8%の望月の事例をみよう。小布施の北西約3kmの浅野は、鳥居川が千曲川に流入し、浅川が東流する標高約330mに位置し、北国街道及び同東街道に沿う旧飯山藩領であった。土壌は中等ないし下等であり、早稲・大麦・大豆・桑に適するが、水田の早害や、畑における霖雨時の水腐れもみられた。

耕地の54%が畑、残りが水田であり、1戸あたりの家族数は4.7人であったが、同じく耕地面積は6反9畝に過ぎなかった。村内自用の農産物は、上等米38石のほかは、すべて下等品であり、それらは大麦253石、小麦145石、大豆44石、稗114石²⁰⁾、粟17石、綿1,051貫であった。しかし同じく村内自用の水産物である鯉・鰯各4貫、鮠3貫、鮒・鯪・鱈各1貫、鮎800匁は、いずれも美質品であった。

一方、移出品については、下等品として、大豆15石が長野及び高井郡へ、また菜種97石、綿225貫が長野及び隣村の商人へ売られたほかは、上等品として、米165石が高井郡へ、また繭146貫、生糸9貫が長野及び高井郡へ送られていた。ここでは、農家数179戸のうち104戸が「農桑を業²¹⁾」とし、商い25戸、工人22戸、漁獵4戸、医者1戸、車馬運送15戸を数え、養蚕・縫織に従事する女は各20人であった。また戸口の移動については、転入8戸、転出18人(男14人²²⁾・

女4人)であった。牝馬41頭・牡馬15頭、牡牛1頭、人力車(1人乗り)1輛、荷車(中車)3輛、渡船2艘、漁船2艘、荷船1艘を保有し、地租米400石=2,063円、雑税1円を納め、「富者三分²³⁾」とされていたのである。

山部の東方約5kmの望月は、標高約660mに位置し、かつては、中山道を中心に長野・松本両往還にも通ずる小諸藩領の宿場町であった。全面積の約14%をしめる山林のほかは、田・畑が相半ばする耕地であった。1戸あたりの家族数は5.6人であったが、同じく耕地面積は5反1畝に過ぎなかった。

生産物のうち村内自用を主とするのは、上等米1,000石、大麦190石、小麦81石、大豆70石、小豆10石、蕎麦60石であった。これに対して上等米100石、繭200貫、上等生糸10貫、下等真綿4貫が群馬県へ、中等御種人参130貫が横浜へ、瓦1万枚が近村へ、さらに水豆腐2,000連が在町商人へ売られていた。つまり米と蚕糸品が上等品であり、この両者が地域経済の支柱をなしていたといえよう。

総数179戸のうちには、耕作農家160戸、農間商い13戸、同瓦師13戸が含まれ、女は農桑・蚕糸に従事するほか、冬から春にかけて村内自用の木綿を織っていた²⁴⁾。牡馬6頭、人力車(1人乗り)3輛を保有し、貢租として地租米345石=1,910円²⁵⁾、賦金5円、山林税70銭、雑税60銭を納めていた。

最高活性化地域の集落のうち、「富者六分²⁶⁾」の磯部は、北国街道沿いの旧幕府領であり、人力車・荷車の普及率が高く、蚕種が武甲・上・飛各州に出荷され、米・木綿などの上等品が村内自用であった。山布施・越戸^{ごうど}はともに「富者三分²⁷⁾」とされていたが、旧松代藩領の山布施は牡馬を比較的多く保有し、旧上田藩領の越戸では、雑税額が多く、織物を上田へ送るほか、蚕種を海外及び国内各地へ出荷していた。「富者二〜三分²⁸⁾」とされる旧須坂藩領の日滝は、北国東街道・草津道・中野道に沿い、1戸あたりの耕地面積は1町5反に及んでいた。

箕作^{みづく}・山部と前述の望月は、いずれも「富者

二分²⁹⁾」とされていた。箕作は旧幕府領であり、下等生糸を北国脇往還経由で十日町(越後)へ出荷していた。山部は旧小諸藩領で、中山道に近くて松本往還に沿い、かなりの人口移動がみられたが、転出・転入ともに同数を示し、算出される中等米の大部分は村内自用であった。望月では、女子人口の転入がめだち、五街道宿駅に由来する賑いを示していた。柳沢・上木島は、ともに旧幕府領であったが、北国脇往還沿いの柳沢では、米・麦・豆類・鶏卵・蚕卵紙・生糸・真綿・白紬・木綿などの中等品が、すべて村内自用であった。また木島道及びその支道に沿う上木島からは、木島紙が飯山のほか越後側にも出荷されていた。

高活性化地域において、農間稼ぎ戸数率が98%に達した社と、同じく7%の神城^{やしろ}の両集落の事例をみよう。八坂の西南に続く社^{やしろ}は、地形的には、東に大峯山を負い、西は高瀬川に臨み、集落は標高約650mに位置し、越後街道(北国脇往還西街道)と上田街道に沿う旧松本藩領であった。土壌は比較的良質で、稲・煙草・桑・楮に適していたが、畑と高位水田では旱害の恐れが多かった。村域面積の71%が山林であり、耕地の71%は水田で、残りが畑であった。1戸あたりの家族数は5人であり、同じく耕地面積は8反7畝であった。

生産物の販路については、清酒500石は近村、生柿700駄は北安曇郡内、醤油60石は近村または上田辺り、木綿布100反は大町・池田両駅、繭10石は長野県内³⁰⁾、半夏5貫、茯苓8貫、桔梗30貫、蒼朮10貫、薄荷150貫、白朮10貫、芍薬15貫、杏仁5貫、桃仁5貫、牡丹皮5貫の薬草類は富山、宮本紙1万1,500束は越後・尾張、葉煙草約300駄は三河・尾張・越後、刻煙草500個は東京・尾張・伊勢・三河・越後、さらに生糸8貫は横浜・京都へと、拡大されていた。

総数350戸の農間余業として、男については刻煙草製造180戸、紙漉150戸、桑業・紺屋各5戸、瓦焼・醤油醸造各1戸のほか、中馬駄賃稼50人、漁猟31人、商業30人、大工9人、酒醸造3人、また女についても紙漉150人、刻葛葉卷

製造50人、木綿糸賃取り30人、養蚕20人、縫織15人、製糸10人、紙漉簾製造3人に及んでいた。

牝馬212頭、牡馬7頭を保有し、貢租として地租米708石=2,577円、雑税211円を納入していた。八坂と同様に、上述のような広大な生産物出荷圏と多岐にわたる農間余業は、「産業を起こさん事を好む³¹⁾」風潮を醸成したものとみられる。

北城に南接する神城^{かみじょう}は、北城と同様に、東・西・北に山地が多く、南は平坦であったが、南高北低の地形を示していた。集落は標高700~750mに位置し、南北方向の越後街道³²⁾とその支道に沿う旧松本藩領であった。村域面積の80%は山林であり、耕地の70%が水田で残りは畑であった。土壌はやせ地だが稲・蕎麦・稷には適し、灌漑の便はあるものの、しばしば旱害に苦しんでいた。

1戸あたりの家族数は4.4人であったが、同じく耕地面積は9反5畝と、比較的広かった。生産物については、米5,211石のうち、村内自用³³⁾のほかは善光寺及びその周辺に送られたが、稗300石、大豆20石、蕎麦25石、葛46貫はすべて村内自用であった。一方、清酒は近郷へ、畳縁布200反余、畳糸100貫は松本へ、さらに麻は遠く京都・大阪・三重・和歌山・愛知・静岡・山梨・東京・富山・新潟(越後)・石川(加賀)の各府県へ送られていた。

11月~3月の積雪期には、耕作が不可能であるため、製麻に携わったり、日本海沿岸からの運送諸荷物の駄賃稼ぎに従事していた。雪解けになると男は薪採り、女は麻布のつづれ織や畳糸の製造を始めた。農間余業としては粥業5戸、牛馬売買16戸、酒造3戸、絞油4戸、酒商4戸、紺屋織2戸、漁猟7人、肴振売り8人、諸商い7人、杣職8人、大工職17人、鍛冶職4人、屋根職2人、桶職4人のほか、中馬駄賃稼³⁴⁾や木挽が認められた。転入は2戸であり、牝馬634頭、牡馬10頭、牝牛86頭の保有は牧養の盛況を示唆し、貢租として地租米653石=3,791円、雑税21円を納めていた³⁵⁾。かくて家産については「富家六分³⁶⁾」とされていた。

高活性化地域の集落数の71%は、旧松本藩領であった。「貧富相半ば³⁷⁾」する科布^{しなの}では雑税額が比較的多く、繭・空蛹・山繭、足袋裏を群馬県へ、生糸を横浜へ各出荷していた。さらに「富者四分³⁸⁾」の北城では牧馬が盛んであり、麻を名古屋へ送っていた。「富者二分³⁹⁾」の平では牧牛がきわめて盛んであり、上等麻苧を名古屋と吉田（豊橋）へ出荷していた。「貧者十中ノ八九⁴⁰⁾」の北小谷でも牧牛が盛んであり、楮を大町・糸魚川へ、上等麻布を吉田へ送っていた。「産業を起こさん事を好む⁴¹⁾」八坂では、薬草類を大町へ、麻を三河・尾張へ、宮本紙を越後・尾張へ、煙草を三河・尾張・越後・東京へ出荷していた。また上質煙草は、牡馬・牡牛の保有がやや多い東川手から、関東・名古屋・北陸方面へ売られていた。

一方、旧松代藩領に属する丹波島と向八幡は、ともに「富者三分⁴²⁾」とされていた。丹波島では養蚕が普及し、また1戸あたりの荷車・人力車保有数が卓越し、「農隙工商或は荷車人力車を挽くを以て業⁴³⁾」とする農家が多かった。そして実綿・繭・生糸・菜種のほか鮭・鱒・鰻などを、商人を通じて出荷していた。向八幡では人口流入が多く、上質の繊維品・食料品が生産され、とりわけ繊維品の多くが、陸路と水路を利用して出荷されていた。

さらに旧幕府領の金井と牧をみよう。「淳朴にして過半古習を存す。維新以来漸次開化に嚮う⁴⁴⁾」とされる金井では、人口流入が比較的多く、食料生産は村内需要を賄えなかった。しかし煙草・真綿・紬縞の各上質品を全国的に出荷し、また上質の蚕種・生糸を輸出していた。金井と同様に「淳朴古を存し、総て堅実⁴⁵⁾」といわれた牧は、「富者一分⁴⁶⁾」の高冷地であり、牡牛の保有が多く、中～下等の食料品が村内自用であり、苧生産の25%、炭・山竹生産のほとんどを、須坂～長野へ出荷していたのである。

対象集落数の42%をしめる最低活性化集落において、農間稼ぎ戸数率100%に達していた新開、同じく51%の上片桐、42%の飯島の3集落の事例をみよう。木祖に南接し木曾川本・支流

に沿う新開は、駒ヶ岳の北麓にあたり、中山道・飛州往還に通じる旧尾張藩領であった。集落の標高はほぼ300～1,000mに達し、村域面積⁴⁷⁾の95%が秣山・山林であり、耕地の53%が水田、残りが畑であった。1戸あたりの家族数は5.4人であり、同じく耕地面積は8反3畝であった⁴⁸⁾。土壌は五穀・桑・麻に適していたとはいえ、一般に礫确であり、とくに切畑には菽・蕎麦が栽培されることが多かった。

生産物とその販路については、生繭2,000貫が福島（木曾）に売られており、福島原繭集荷園に属していた。一方、馬に関しては、「母馬凡八百頭にて、年々子を産する牝牡、凡二百九十頭。東は本州、甲、相。西は参、遠、濃、尾、飛、越前に販売⁴⁹⁾」し、牧養業の著しい進展を表していた。牝馬800頭、牡馬55頭を保有していたのである。

全数343戸は養蚕農家を主体としていたが、そのほとんどが農間余業に携わり、自用以外の薪炭を福島に販売するものが137戸、染工・水車・大工・木挽・板片木・桶師の類が159戸、銃猟業34戸、馬喰9戸、酒造1戸を数えていた。また女は桑・麻の栽培及び薪炭採取に従事していた。

土族の戸口は3戸、16人（男女各8人）に過ぎず、貢租としては地租米133石＝1,040円、雑税55円を納めていた。しかし「木曾川の東南方、一等道路⁵⁰⁾に属する村落は、奢侈を覚え貧民多し。川の西北方の村々は儉素を守り、力役に従事するが故に衣食に足るもの半に過ぐ⁵¹⁾」とされ、交通量の多寡が、木曾川を挟む東南・北西両地域の活性化の差異をもたらしていた⁵²⁾。

南流する天竜川を挟んで、南向の対岸に位置する片桐には、授業料無料・生徒数185～350人校立地集落が、3校（七久保・上片桐・田島）分布していた。ここは烏帽子岳東麓の旧幕府領であり、伊那街道が南北に通じ、北の与田切川、中央の前沢川、南の松川は、いずれも東流して天竜川に注ぐ。集落の標高は約500～700mであり、土壌は不良で、桑には適するものの、稲・茶には不適とされ、しばしば水害を受けていた。

村域面積の86%は山林・原野であり、耕地面積の53%が畑であって、残りが水田であった。

1戸あたりの家族数は5.6人であり、耕地面積は9反5畝であった。生産物については、農産品・林産品・醸造品では蕎麦500石と竹4万2,000貫が上等品であり、桑10万3,000貫が中等品であった。しかし米7,000石、大麦1,500石、小麦500石、大豆400石、粟220石、稗1,800石、柿48万個、清酒610石、材木（松・杉の角材）1,000本、屋根板（栗材・松材・桐材）1万2,000束は、すべて下等品であった。これらのうち、屋根板の集散地は飯田と上穂（赤穂）であった。一方、繊維品関係では、真綿20貫、蚕種200枚が下等品であったほかは、蛹3,000貫、生糸96貫、白木綿2,800反は、すべて上等品であった。

総数900戸のうち、持ち家843戸に対して、借家は57戸であった。農間余業の中で最も多いのは中馬稼ぎ127戸であり、これに次いで生糸売買・大工・杣木挽き各38戸、車力26戸、漁業25戸、牛馬売買22戸、宿屋21戸、銃猟18戸、煮売り13戸、製糸12戸、魚鳥商11戸、桶工9戸、染屋8戸、菓子製造・石工・鍛冶各7戸、屋根工26戸、酒造・質屋・指物職・栴屋各5戸、髪結4戸、音曲指南・左官各2戸の計461戸に達し、総戸数の過半をしめていた。また機杼・紡績・養蚕を営む女は、700人に及んでいた。

牧養を示唆する牝馬782頭のほか、渡船・通船各2艘⁵³⁾を保有し、賃租として地租米1,094石=7,355円、賦金230円、雑税222円を納めていた。しかし戸口の移動については、転入1戸、2人（男女各1人）に対して、転出は64人（男40人、女24人）であり、しかも女子人口中には、捨て子3人を含んでいた。

中田切川を隔てて赤穂の南に接する飯島は、南駒ヶ岳の東麓にあたり、東は天竜川、南は与田切川によって境され、伊那街道・下街道に沿う旧幕府領であった。集落は標高約600~700mに位置し、村域面積⁵⁴⁾の72%は、秣山・山林・原野を主としていた。耕地のうち57%が水田であり、残りが畑であった。

農家1戸あたりの家族数は5.5人であり、同

じく耕地面積は9反1畝であった。土壌の良否は中程度であり、桑・稲・稗・蕎麦に適するとされていたが、霖雨による被害が大きかった。生産物のうち、生柿4,540粒はすべて村内自用であったが、乾柿については、村内自用4万3,200個に対し9万6,000個が、主として筑摩・諏訪両郡へ出荷され、竹にいたっては、村内自用2,000貫をはるかに越える1万3,000貫が、おもに上記両郡へ送られていた。さらに、当地産の原繭2,537貫による生糸168貫は、すべて横浜に向けられた。

総数621戸のほとんどは養蚕農家であったが、農間余業は、商い25戸、工と称されるもの61戸、猟業29戸、中馬稼ぎ59戸であった。また、女の農間余業は養蚕34人、商い5人、養蚕と紡績・縫織を兼ねるもの1,100人であった。戸口の転入は6戸、42人（男23人、女19人）に及び、牝馬529頭、荷船⁵⁵⁾2艘を保有し、賃租として地租米810石=5,206円、雑税248円を納めていた。しかし「貧者多く、富者少なし⁵⁶⁾」とされ、人口のうちには、捨て子5人（男3人、女2人）が含まれていた。

最低活性化集落のうち、「富者は三分の一⁵⁷⁾」であった旧高遠藩領の宮田では、人力車の保有があり、雑税額がやや高かった。しかし人口の転出が多く、農産物市場は自村と木曽谷に限られ、上等生糸だけが横浜へ出荷されていた。

「富者二分⁵⁸⁾」であった旧松本藩の高家では、牝馬の保有や雑税額がやや多かったが、中等の蚕種紙が横浜へ送られる以外、第一次産品の出荷市場は自村及び松本にとどまっていた。

「富者一分に過⁵⁹⁾」ぎなかった旧幕府領の赤穂（上穂・小町谷⁶⁰⁾）では、人力車・荷車の分布が認められ、馬がかなり保有され、上質生糸を横浜へ出荷していたが、人口は出超であった。「一分は富⁶⁰⁾」んでいた旧幕府領の大草では、人口の転入が認められたものの、「山間隔絶の地位、家屋疎々にして七分は茅屋、三分は板屋根、中古以上は、風武により、俗美ならず、中古以降は風俗雑々として賤し⁶¹⁾」という景観であり、霖雨・洪水・旱害に苦しんでいた。同じ

く「富者一分⁶²⁾」とされる旧幕府領三綱では、主要出荷品である上質串柿が、東京中心の全国的市場をもつに過ぎなかった。同様に「富者一分⁶³⁾」の旧飯田藩里見(名子)では雑税額が多かったが、農産物及び繊維関係品の出荷市場は、自村及び飯田にとどまっていた。

「富民少く貧民多し⁶⁴⁾」とされる旧松本藩領の倭^{やまと}では牡馬率が高く、生産した農産物の多くを松本に出荷していた。「破産して貧居するもの多く、富むるもの稀なり⁶⁵⁾」とされる旧高須藩領^{あさぎ}の旦開は、転入人口・雑税額・馬保有数がいずれ也多かった。しかし生産物の出荷範囲については、生糸・藍・楮が飯田、穀物・豆類・葉煙草・串柿・清酒が三河、粗雑木製品が名古屋、馬が遠江・美濃と、伊那盆地～東海地方に限られていた。旧松本藩領の有明では、山蚕繭の生産が主体であり、上等山繭糸を美濃・越後、出穀蛹を安芸・上野、上等山蚕種を肥前・常陸・下野・下総・越後へ出荷したほか、上等生糸をわずかに桐生・横浜へ送っていた。

旧尾張藩領^{きせ}の木祖では、馬の保有や雑税額がやや多かったが、高地における山林・原野が広く、零細農にとっての適作物は蕎麦であった。全国市場をもつのは東京・京都・大阪向けの本櫛^きだけであり、馬や繭は近在向けに限られていた。同じく旧尾張藩領の駒ヶ根においても、高地の山林・原野が広く、馬がやや多く飼われ、さらに人口の入超が認められた。また馬・煙草・中研石のほか、生糸・繭をわずかに出荷していた。農間商いは製糸を兼ねるとともに、耕馬を零細農に貸し付けることが多かった。そして農間職人は、冬季に出稼ぎのため村を離れた。

同じく旧尾張藩^{よみかき}の読書においても、馬の保有がやや多かったが、人口の出超が認められた。茶・桃・柿・梨を西筑摩郡内、楮を美濃に送っていたが、全国的に出荷されたのは、下等繭と不良繭だけである。旧高遠藩領の伊那においては、人力車の保有がみられるものの、人口の出超が著しかった。そして清酒・醬油を近隣へ、上等・下等相半ばする米を木曾谷へ、荳・菜種を飯田へ、繭のほとんどを諏訪郡へ送っていたが、

すべて南信への出荷にとどまっていた。

旧幕府領の喬木^{たかぎ}(阿島)では、雑税額が多く、生産物のうち、木綿を諏訪・松本へ、傘を諏訪・松本・上田へ送っていた。京都ならびに横浜へ広範に出荷されていたのは、生糸だけである。旧高島藩領の本郷では、牧馬が盛んであったが、男を主とする人口転出が著しく、捨て子の記載が認められる。高距集落であるため、水田灌漑用水の低温に悩まれ、適作物としてあげられたのは、稗・蕎麦・麻・大豆・小豆だけである。

V. むすび

東日本におけるプロト産業化期の活性化が最も著しく表れた群馬・埼玉両県に西接し、両県よりも低次の活性化を遂げたとみられる長野県を対象として、公立小学校立地集落における活性化地域の特質を比較検討すると、次のように要約される。

(1) 関東北西部と北陸を結ぶ実質的な連繫ルートからの懸隔度が高まるにつれて、最高活性化地域から高活性化地域へ、さらに最低活性化地域へという分布パターンが形成されていた(図1)。

(2) 最高活性化地域と高活性化地域を合わせ考えると、旧幕府領に立地する集落が少なく、小所領域を介在させつつも、一般的には大所領域に立地する集落が多かった。これに対して最低活性化地域は、旧幕府領に立地する集落が多い反面、尾張藩(木曾谷)を除けば、一般的には小所領域に立地する集落が多かったのである(図2)。

(3) 最高活性化・高活性化両地域の南部と、最低活性化地域(ただし木曾谷は北部だけ)では、雑税の納入額が多く、これらの地域における第三次産業の伸展を示唆していた(図3)。

(4) 寄留人口によって人口移動をみると、人口移動が多いのは、北国街道沿いの最高活性化地域及び高活性化地域東部と、諏訪東南部及び三州・遠州両街道沿いの最低活性化地域であった。この両地域を比較すると、一般に前者では転入、後者では転出がそれぞれ優位をしめてい

た(図4, 5)。

(5) 一般に活性化が高い地域ほど、1戸あたりの馬保有頭数が少なかった。最低活性化地域では、雑税額や人口流出が多くて旧幕府領を主とする伊那盆地よりも、それらの少ない旧尾張藩領の木曽谷の方が、馬保有頭数が多かった。最高活性化地域及び高活性化地域では、雑税額の多い南部において牡馬率が高かった。牡馬率の高さは、中馬をはじめとする馬匹利用を反映していた。牛は、おもに高活性化地域において保有されていたが、同地域では牧牛・牧馬ともに、雑税額や人口移動の少ない北部において盛んであった(図6, 7)。

(6) 町屋的な側面の継承ないし伸展を示唆する1戸あたり荷車・人力車の分布主体は、最高活性化地域と高活性化地域東部であった。最高活性化地域においては、人力車が旧幕府領の磯部・柳沢と、旧小諸藩に属して転入人口の多い望月に多く、荷車は上記の磯部のほか、旧飯山藩に属して転入人口の多い浅野に分布していた。高活性化地域においては、旧松代藩の丹波島が荷車数・人力車数ともに卓越し、旧幕府領の金井でも、人力車がかなり多かった。最低活性化地域においては、荷車・人力車が旧幕府領の宮田・伊那、人力車が旧高遠藩の上穂・小町谷にわずかに認められた。つまり、図4, 5において認められる人口移動の分布傾向と類似していたのである(図8)。

(7) 活性化は、具体的には地域の活性化として表れるのは当然であり、最高・高・最低の各活性化地域は、それぞれに対応する集落特性を示す。しかしこのことは、上記の各地域に属する集落について、経済的・社会的・政治的な側面を多面的に考察することによって明瞭になるのであって、一面的な対応関係の分析をもってしては、地域活性化の高低を論ずることはできないことを物語る。

(城西大学経済学部)

[注]

1) 田村正夫(1988):日本におけるプロト産業化

期の地域活性化(1)——群馬・埼玉両県の公立小学校の授業料・教員数を手がかりに——, 城西大学大学院研究年報4, 1頁の注。

2) 前掲1), 1~23頁, 別図10枚。

3) 田村正夫(1990):日本におけるプロト産業化期の地域活性化(2)——群馬・埼玉両県における公立小学校立地集落の最高活性化——, 歴史地理学紀要, 32, 109~128頁。

4) 田村正夫(1991):日本におけるプロト産業化期の地域活性化(3)——群馬・埼玉両県における公立小学校立地集落の最低活性化——, 歴史地理学, 153, 1~20頁。

5) 前掲1), 別図II a, II b。

6) 旧長野県域と筑摩県の一部が合併して現長野県域となったのは、明治9(1876)年である。

7) 文部省(1874):『第2年報』付録, 130頁。

8) 既に前掲2)において全国的な活性化傾向を把握することができたので、本稿では前掲3), 4)と異なる活性化規準を設定した。

9) 長野県(1874~1883):『長野県町村誌』第1巻北信篇, 第2巻東信篇, 第3巻中南信篇, 郷土出版社(1985復刻)。

10) 前掲4), 図1, 2頁。

11) 田村正夫(1970):北陸における明治前期の繊維産業——織物業を中心に——, 歴史地理学紀要, 12, 29~49頁。

12) この点について多くの示唆を与えるのは、黒崎千晴(1952):『経済地理よりみた善光寺平東部の交通——鉄道開通以前の大笹往還を中心として——, 信濃, 4-3, 235~248頁である。

13) 前掲5)。

14) 田村正夫(1972):日本製糸業の地域的展開, 城西経済学会誌, 8-1, 70~73頁。

15) 小松芳郎(1989):松本藩(木村 礎・藤野 保・村上 直編『藩史大事典, 第3巻』雄山閣), 443頁。

16) 3万石のうち、伊那は1万5,000石。

所 史隆(1989):高須藩(前掲15)), 100頁。

17) 慶安元(1648)年以降、幕末まで10万石。

鬼頭康之(1989):松代藩(前掲15)), 383~384頁。

18) 表高2万石。

金井清敏(1989):飯山藩(前掲15)), 351頁。

19) 前掲4), 5・17頁。

- 20) 牛馬の飼料用であった。
- 21) 前掲9), 第1巻, 543頁。
- 22) 転出16人に対して転入2人であり, 差し引き転出14人であった。
- 23) 前掲21), 544頁。
- 24) これらに従事する女子労働力は, 女子人口の41%をしめる220人(うち農・桑・養蚕主体200人, 製糸主体20人)であった。
- 25) ほか正米67石。
- 26) 前掲9), 第2巻, 1440頁。
- 27) 前掲21), 544頁。
- 28) 前掲21), 782頁。
- 29) 前掲21), 1138頁。
- 30) 輸出用生糸の原料繭であった。
- 31) 前掲9), 第3巻, 2818頁。
- 32) 支道には, 長野に向かう道と鬼無里〜戸隠へ向かう道があった。
- 33) 村内の食用及び酒造用。
- 34) 中馬駄賃稼ぎの鑑札は, 452枚であった。
- 35) 明治7年の追記載による。
- 36) 前掲31)
- 37) 前掲31), 2898頁。
- 38) 前掲31), 2862頁。
- 39) 前掲31), 2844頁。
- 40) 前掲31), 2870頁。
- 41) 前掲31), 2827頁。
- 42) 前掲21), 1389頁。
- 43) 前掲42)。
- 44) 前掲9), 第2巻, 1422頁。
- 45) 前掲21), 788頁。
- 46) 前掲45)。
- 47) 村域面積の2.1倍に及ぶ官林面積を除く。
- 48) 東部の大原川流域を除くと, 一般に切畑が多かった。
- 49) 前掲9), 第3巻, 3219頁。
- 50) 中山道。
- 51) 前掲49)。
- 52) これは, 人や物の往来が多くなるにしたがって, 階層分化が促され, 貧民層も増加した例とみられる。なお小学校は木曾川の東南方に立地していた。
- 53) 渡船は長さ7間・幅尺5, 通船は長さ7間5寸, 幅5尺1寸。
- 54) 村域の外側には, その5倍余りに及ぶ御備山公有林があった。
- 55) 50石未満。
- 56) 前掲49), 3585頁。
- 57) 前掲49), 3573頁。
- 58) 前掲49), 2919頁。
- 59) 前掲49), 3578頁。
- 60) 前掲49), 3493頁。
- 61) 前掲49), 3492頁。
- 62) 前掲49), 3673頁。
- 63) 前掲49), 3631頁。
- 64) 前掲49), 2892頁。
- 65) 前掲49), 3706頁。

THE REGIONAL ACTIVATION IN THE PROTO-INDUSTRIALIZED PERIOD OF JAPAN (PART 4) : THE ACTIVATION OF THE SETTLEMENTS WITH SCHOOLS IN NAGANO PREFECTURE

Masao TAMURA

In three previous articles concerning the regional development of Japanese industrialization, the author discussed the activation of the proto-industrial period in Gunma and Saitama prefectures under the assumption that industrialization and activation took place at the same time.

The present study chose the number of pupils per teacher and the school fee per pupil as indices of activation. Among the schools with fewer than 15 pupils per teacher, it was determined as most highly activated when the fee was "proper", while those with no fee were judged as highly activated. On the other hand, the schools with 185 to 350

pupils per teacher were considered as the least activated when fee was free.

This study analyzed Nagano prefecture, which achieved a lower activation than the adjacent Gunma and Saitama prefectures. The results of the analyses were as follows.

1. The most highly activated regions were close to the main route connecting the northwestern Kanto and Hokuriku. The regions changed from "highly activated" to "activated" as they became farther to the route.

2. Among the most highly activated and the highly activated regions, the villages under the original Tokugawa domain were few, while those in the large fiefs were numerous. By contrast, the least activated region had more villages under the original Tokugawa domain and the small fiefs.

3. Tax revenue (*zatsuzei*) was high in the southern parts of the most highly activated and the activated regions as well as in the least activated region. The tax revenue indicated the growth of the tertiary industry in those regions.

4. Through the analysis of the number of sojourners (*kiriyū*), it became evident that frequent population movements occurred in the most highly activated region along the Hokkoku road, the eastern part of the highly activated region, and the least activated region along the Sanshu and Enshu roads. The former region had a larger inflow of the population, while the latter had a larger outflow.

5. The higher the degree of activation became, the fewer horses an average household had. The least activated area, such as Kisodani of the original Owari fief, had many horses. Among the most highly activated and highly activated regions, the southern area, which paid a large amount of tax, had more male horses, reflecting the active commodity distribution activities. Cattle raising was most active in the north, which had less tax revenue and population movements.

6. The carts and *jinrikisha* per household, which represent the *machiya's* characteristics as a commercial center, were more numerous in the most highly activated region and the eastern part of the highly activated region. In the most highly activated region, many *jinrikisha* were seen in Isobe and Yanagisawa, originally under the Tokugawa domain, and Mochizuki under the original Komoro fief domain. Many carts were in Isobe and Asano of the original Iiyama fief. Tanbajima of the Matsushiro fief, which belonged to the highly activated region, had the most carts and *jinrikisha*. Kanai under the Tokugawa domain also had many *jinrikisha*. In the least activated region, carts and *jinrikisha* were seen merely in Miyata and Ina of the Tokugawa domain. *Jinrikisha* were also seen in uwabu and Komachiya of the Takatou fief. The distribution was similar to that of the population movement.

7. The degree of activation in a region or in a settlement is related with the various characteristics of the region or the settlement. In order to clarify this relationship, it is necessary to consider the political, social and economic aspects of the region or the settlement.